

## 論文審査の結果の要旨

塩飽直子

本論文は、仏道を「自己をならふ」ものと捉える道元を思想を手がかりに、仏法という枠組みにおいて捉えられる本来的自己のありようとその実現の仕方とを明らかにしようとするものである。

道元は、教え(経)の理論を探究して悟りを目指すあり方を否定し、過去の仏から伝えられてきた修行法を実践し、伝えられていくこと以外に仏道はないと考える。すなわち、本来の自己は修行の実践・継承においてのみ、今・この自己にあらわれてくるとされる。論者が注目するのは、本来的自己が、教えを受け、それを伝えるという「伝法」の接点に成り立つというこのことの構造である。本論は、この伝法の構造を道元の所論に沿って詳細に分析しつつ、仏法として捉えられた世界における本来的自己のありようを明らかにしていく。

本論は、大きく二つの部分から成っている。前半部分においては、「教え」や「経」をめぐる道元の独特の理解が分析される。論者によれば、道元が仏法に言及する仕方は、三つに分けられるという。第一に「単伝」という形で師から弟子に伝えられていくものとしての仏法、第二に、人が本来自らの内に備えているものとしての仏法、第三に、修行において開けてくる事物の実相である。これら三様の仕方で語られる「仏法」の内実及び相互関係の分析を通して、論者は、道元のいう仏法、すなわち本来的自己は、根源的には自己と「尽十法界」との間で成り立つ、相互的かつ無限の「伝法」関係そのものであると捉える。そして、叢林における修行において、今・ここに具体的に実現する「伝法」関係は、「尽十法界」大の無限の「伝法」関係を現わす仕方としての特権的な行為(妙修)であり、同時に今・ここを超えていく契機として、それ自体日々乗り越えられていくべきものでもある。このことを論者は、日々の修行において無限の生死が超えられていくとする道元の言葉と結びつけ、今日の私たちの生き方をめぐる思索の手がかりとしようと試みる。

本論後半部分では、道元の主著『正法眼蔵』の「山水経」巻が分析される。論者によれば、眼前の「山水」が「経」であることを示すこの巻は、伝法関係のダイナミズムそれ自体が本来の自己の実現であることを直接の主題としたものであると捉えられる。ここでは、『正法眼蔵』特有の難解な行論が丹念に解きほぐされる。特に、道元が、この巻の主題である「青山常運歩」「石女夜生児」という言葉を、「尽十法界」大の伝法と、現実の叢林における伝法との相互運動を示すものとして説いていることが明らかにされる。そして、論者はそのことを、今の生における自己と、無限の生死を超える自己との往還関係として捉え直すことができるものと結論づけるのである。

以上本論文は、伝法における師弟相互関係の中に、道元が見出していた仏法のあり方を、倫理学における「自己」の問題として捉え直したものである。特に、道元の「単伝」という考え方を世界観の構造として解き明かしているのは、本論文の大きな特色であり、この点は評価に値する。一方で、『正法眼蔵』細部の解釈については、今後詰めるべき点も残されている。また、分析に用いられる概念の規定にやや揺れが見られるなど問題がないわけではない。とはいえ、倫理学の今日的な問題関心に基づいて、難解をもって知られる道元思想の核心部分を一定の理路によって読み解いた点は、高く評価できる。

以上により、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判定する。